



イーストウッド! すべてを懸けて

松本 侑壬子・ジャーナリスト

女性ボクサーと老トレーナーの固い絆を描いたアカデミー賞受賞作品『ミリオンダラー・ベイビー』から4年、米俳優／監督クリント・イーストウッドが再び主演・監督に挑む最新作。

自動車産業が斜陽で、寂れたシカゴの住宅地。朝鮮戦争の元帰還兵ウォルト・コワルスキー（イーストウッド）は、最近妻を喪い、ますます頑固で偏屈な孤老になった。自動車工場勤務時代の仲間は皆いなくなり、今ではこの辺りの住人と言えば、アジアからの難民や移住者ばかり。そんな隣人に人種差別的な暴言を吐き、庭の芝を踏む者がいると、本気でM-1ライフルで脅して追い払う。唯一の楽しみは、工場時代に手掛けた72年型高級車グラン・トリノを磨き上げ、ビール片手にほればれと眺めるひとときだ。

そんな暮らしが、ある夜破られる。自慢の愛車が盗まれかけたのだ。これがきっかけでウォルトは隣家のラオス・モン族の一家と知り合う。父親はなく、祖母、母、姉の大家族と暮らす16歳の少年タオは、学校にも仕事にも行かず不安定で、不良に付け込まれそうになっている。しっかり者の姉スーは、そんな弟を庇い不良どもに対して一歩も引かない。しかし、相手は飛び道具を持ち、人を殺しても何とも思わない連中だ。

初めはモン族の習慣に閉口していたウォルトだったが、次第に隣人らを放っておくわけには

いかなくなる。力で攻撃されたときに、力で撥ね返すやり方、口で相手をぶちかます会話術、相手に弱いと思わせない動き方など、ウォルトは自分が考える“男らしさ”を、父親のいないタオに身をもって教え込もうとし始める…。

時代は大きく変わっているのに、朝鮮戦争だのベトナム戦争だの時代の価値観からまだ脱し切れない老人ウォルトは、銃を毎晩手入れし、歯には歯を！と身構えるのが正しい“男らしさ”と信じている。町のチンピラたちもまた、苦勞した親の世代と違い、徒党を組んで我がもの顔に町中を闊歩する。そして、ついにスーがならず者集団の毒牙にかかるに及んで…。

最初は、大スターがそんな役をやっているのか、と思うほど、エゴイストで偏屈で可愛げのないウォルトだが、どこで考え方がぐるりと反転するのか。他人のためなんて、指の先も思ったこともないはずのウォルトが、悲劇のラストに向かって宿命のように前進する姿の、神々しいまでのカッコよさ。

「カッコいい男って、いるんだ！」などと言うと、双方から糾弾されるかもしれない。一方は、クリント・イーストウッドは昔からカッコよかったことを知らないのか！と。他方は、銃や暴力による解決の方法をカッコいいと称賛することは、暴力の連鎖を呼ぶ。女性が称賛してどうする、というもの。確かに、確かに。

だが、イーストウッドのカッコよさは、スタイルや見た目だけではない。暴力とその対極にある人間の優しさや誇りや愛などの内的力との相互力学、人種や性別、階層による分断への挑戦といった、人間の崇高なチャレンジの姿を果敢に描く、その勇気による。それで、いいのだ！

『グラン・トリノ』

アメリカ映画(117分)／クリント・イーストウッド監督

東京・丸の内ピカデリーほか、全国ロードショー

©2009 Warner Bros. Entertainment Inc. and Village Roadshow Films (BVI) Limited. All Rights Reserved

